

武蔵野日曜聖書講筵 復活節

復活のキリスト

――コリント前書第15章1～58節――

1974年4月14日

小池辰雄

あるがままの姿で自分をぶちまける 十字架は無条件の場を与えている 復活という生命を与える 平安なんじらに在れ 霊肉霊骨 キリストはわが骨の骨、肉の肉 詩「新日本に寄する」十字架・復活・聖霊は離すことができない 復活のキリストが現れた キリスト自身が恩恵体 死人の復活という目的 血気の体、霊の体 復活のキリストと共に地上で甦っている人 天地一如 一つに渾然となってしまう

【コリント前15】

1 兄弟よ、さきにわが伝えし福音を更に復^{また}なんじらに示す。汝らは之を受け、之に頼りて立ちたり。2 なんじら徒らに信ぜずして我が伝えし^{また}まを堅く守らば、この福音に由りて救われん。3 わが第一に汝らに伝えしは、我が受けし所にして、キリスト聖書に应じて我らの罪のために死に、4 また葬られ、聖書に应じて三日めに甦^{よみがえり}えり、5 ケパに現れ、後に十二弟子に現れ給いし事なり。6 次に五百人以上の兄弟に同時にあらわれ給えり。その中には既に眠りたる者もあれど、多くは今なお世にあり。7 次にヤコブに現れ、次にすべての使徒に現れ、8 最終^{いやはて}には月足らぬ者のごとき我にも現れ給えり。9 我は神の教会を迫害したれば、使徒と称えらるるに足らぬ者にて使徒のうち最小^{いとちひいさ}き者なり。10 然るに我が今の如くなるは、神の恩恵^{めぐみ}に由るなり。斯てその賜わ^{たまわ}りし御恵は空しくならずして、凡ての使徒よりも我は多く働けり。これ我にあらず、我と偕にある神の恩恵なり。……

12 キリストは死人の中より甦^{よみがえり}えりと宣^{のたま}べ伝うるに、汝等のうちに、死人の復活なしと云う者のあるは何ぞや。13 もし死人の復活なくば、キリストもまた甦^{よみがえり}えり給わざりしならん。14 もしキリスト甦^{よみがえり}えり給わざりしならば、我らの宣教も空しく、汝らの信仰もまた空しからん、……

31 兄弟よ、われらの主イエス・キリストに在りて、汝等につき我が有てる誇によりて誓い、我は日々に死すと言う。……

35 然れど人あるいは言わん、死人いかにして甦^{よみがえり}えるべきか、如何なる体をもて来るべきかと。36 愚かなる者よ、なんじの播^まく所のもの^{きた}の先ず死なずば生^{なま}きず。37 又その播^まく所のものは後に成るべき体を播^まくにあらず、麦にても、



他の穀^{こく}にても、ただ種粒のみ。³⁸然るに神は御意^{したが}に随いて之に体を予え、おのおのの種にその体を予えたもう。³⁹凡ての肉、おなじ肉にあらず、人の肉あり、獣の肉あり、鳥の肉あり、魚の肉あり、⁴⁰天上の体あり、地上の体あり、されど天上の物の光榮は地上の物と異なり。⁴¹日の光榮あり、月の光榮あり、星の光榮あり、此の星はかの星と光榮を異にす。⁴²死人の復活^{よみがえり}もまた斯のごとし。朽つる物にて播^まかれ、朽ちぬものに甦^{よみがえり}えらせられ、⁴³卑しき物にて播かれ、光榮あるものに甦^{よみがえり}えらせられ、弱きものにて播かれ、強きものに甦^{よみがえり}えらせられ、⁴⁴血氣の体にて播かれ、靈の体に甦^{よみがえり}えらせられん。血氣の体ある如く、また靈の体あり。⁴⁵録して始の人アダムは、活ける者となれりとあるが如し。而して終のアダムは、生命を与うる靈となれり。⁴⁶靈のものは前にあらず、反つて血氣のもの前にありて靈のものの後にあり。⁴⁷第一の人は地より出でて土に属し、第二の人は天より出でたる者なり。⁴⁸この土に属する者に、すべて土に属する者は似、この天に属する者に、すべて天に属する者は似るなり。⁴⁹我ら土に属する者の形を有てるごとく、天に属する者の形をも有つべし。⁵⁰兄弟よ、われ之を言わん、血肉は神の国を嗣^もぐこと能わず、朽つるものは朽ちぬものを嗣^もぐことなし。⁵¹視よ、われ汝らに奧義を告げん、我らは悉^{いしめ}とく眠るにはあらず、⁵²終のラッパの鳴らん時みな忽ち瞬間^{たちま またたくま}に化せん。ラッパ鳴りて死人は朽ちぬ者に甦^{よみがえり}えり、我らは化するなり。⁵³そは此の朽つる者は朽ちぬものを著^き、この死ぬる者は死なぬものを著るべければなり。⁵⁴此の朽つるものは朽ちぬものを著、この死ぬる者は死なぬものを著るとき『死は勝に吞^{いずこ}まれたり』と録されたる言は成就すべし。⁵⁵『死よ、なんじの勝は何処^{いずこ}にかある。死よ、なんじの刺^{はり}は何処にかある』⁵⁶死の刺は罪なり、罪の力は律法なり。⁵⁷されど感謝すべきかな、神は我らの主イエス・キリストによりて勝を与えたもう。⁵⁸然れば我が愛する兄弟よ、確^{かた}くして揺^{うご}くことなく、常に勵みて主の事^{わざ}を務めよ、汝等その労の、主にありて空しからぬを知らばなり。

●あるがままの姿で自分をぶちまける

一昨日に映画「ベンハー」の後編を見てましたが、十字架に向かって行くキリストを、癩病人のお母さんと娘さんがこのキリストの姿を見ただけで、癩病が治ってしまった。私はそういう瞬間を見て、なかなかよく聖書の現実をキャッチしているなと思った。

イエスという方は太陽みたいなひとですから、人の目には見えなくても、靈光を発している。この靈光には人を救い上げるところの力があるわけです。力があるけれども、受ける人が信じて受けなかったらば、これはいくらキリストの力がありましても、それは浸



透しない。受ける人がこのキリストを100%に靈的に信ずる。だから、「信」という言葉は大変な言葉です。「キリストが神の子である」という命題を信じたつてどうにもならない。事実、現実です。キリストが持っているところの現^{うつ}の世界です。キリストは正に現実体なんです。これは、そういう力があるという事柄を信じてどうにもならない。

「信ずる」

という言葉が非常に躓きになりますから、まちがえないように。

「信受」

あるいはもう「受」だけでもいい。「受けとる」こと。

藤井先生が私たちによく、

「信頼、信頼」

ということを言われましたけれども、あの「信頼」という言葉は――まあ、先生は結構ですけれども、今考えてみると――「信頼」という言葉でも足りない。「信頼」というと、何かこちらの心の態度――この「受」という「受けとる」というのはこちらの心の態度という――そういうようなことを何か問題とすることとも違うんです。

「全存在的に、あるがままの姿で自分をぶちまける。受けとる。投身する。投げ身する」

ことです。そこに尻もちついたつて何だつていい。

要するに、それが全存在的なんです。全的。あるがままに全的に。「全的」というと、何か非常に精神統一をしなければならいなんて、そうではない。この「全」というのは、「もうどうにもならん」

と、分裂でも何でもいい、かたくなでも。とにかく、あるがままにそのまま――自分なんてものを信じているのでもない。自分の信仰とか、自分の信頼でも何でもない――キリストという現実体にもそのままぶつける。それが本当の信なんです。

あの「ベンハー」に出てくるお母さんと娘は初めはちよつと躊躇していた。けれども、とうとう終いには投げ身の心になった。もつとそこがはつきり出てもいいけれども、その点はまだ弱い面が多少ある。そういうのがこの信。そうすると、魂も肉体も全存在的に、全的に救われてしまう。ただ肉体の癒えることだけが問題ではない。全的に渾然として救いに入る。

キリストという、イエスというひとは正に全的に神の中に投身していた。父なる神に。父の中に投身して、いつもそういう生き方をしていた。申し上げているとおり、自分を何者とも思っていない。これがいわゆる「自主」だとか、自主的だとか、「自由」だとか言っている一般の民主主義的な考え方には躓きなんです。自主だとか、自由だとかね。何か自分が何者かと思つていて。これをやつているうちはダメなんです。

いわゆる「民主主義」には私は反対する。本当の民主はそんなものではない。エイブラハム・



リンカーンあたりは本当のところに入っている。リンカーンの言葉を受けそこなっているわけです。あれは、

「アンダー・ゴッド」(神の下において)

と書いてある。「神の下において」でなければ、「バイ・ザ・ピープル」も、「フォア・ザ・ピープル」も何もありやしない。

〔参考〕 that this nation, under God, shall have a new birth of freedom - and that government of the people, by the people, for the people, shall not perish from the earth. この国に神の下で自由の新しい誕生を迎えさせるために、そして、人民の人民による人民のための政治を地上から決して絶滅させないために、われわれがここで固く決意することである。)

● 十字架は無条件の場を与えている

自分を本当に投げ出している。それがキリストの在り方ですから。キリストの全的な在り方。だから、こつちもキリストに向かつて全的に行くよりかしょうがない。この全的ということとは誰でもができることなんです。誰でもができることでなければ、一番本当の世界ではない。

「こういう条件でなければできません」

とか、

「聖書をよく研究してなければダメだ」

とか、

「どれだけ人を愛していなければダメだ」

とか、そういうことではない。絶対無条件なんです。無条件というのが非常にいい。無条件でなければ、私はもうこんなキリスト教なんてやめますよ。

「もう少しお前はしっかりしなければダメだ」

とかね、

「もつと勉強してからだ」

とか、何とかかんとかと条件付けられたらダメだ。

これは無条件ですから。無条件の世界になると、今度はそこに本ものが湧いてくるから、不思議なことなんです。どんな条件付けよりももつと素晴らしいことが湧いてくる。この無条件は、まず復活の前に何としてもこの十字架を通らなければ、復活に行かない。十字架を通らなければ。

あのゴルゴタに向かつてのキリスト。十字架上に釘付けされて、午後三時になったら、天地晦冥、大雷雨です。ああいう映画は時には見なくてはいかん。第一級品は、必ずそこからいろんなものを得る。およそ、何でも第一級のものはいい。それでないものはどうど



うでもいい。「ベンハー」だの「十戒」なんてのは第一級品だね。

十字架はそういう無条件の世界を、無条件の場を与えている。

「もう全部、私は引き受けた。お前の悩みも苦しみも、精神的なことも肉体的なことも、

あるいは、結婚問題や就職問題や入学問題や様々な問題がある。

どんな問題でも全部、私が引き受けた。心配要らん」

と。「どうにでもなりやがれ」という言葉があるね。キリストは、

「どうにでもなりやがれ」

という場を与えてくださった。

「大丈夫、心配いらん」

と。パウロもしよつちゅう、

「死んでいる、死んでいる」

と言っているでしょ。あの生き生きとしたパウロが、「死んでいる」と言っている。それは本当の生命にいますから、

「相対的な生命にはもう死んでいます。私の生命は絶対的無条件的な生命ですよ」と。「キリストに在る」ということです。

「われキリストと共に十字架せられたり。私はもう生きていません。キリストが私の中に生きていますよ」

とパウロは言った。これが十字架・復活なんです。何も難しいことはない。

ガラテヤ書2章20節、

「われもはや生くるにあらず。キリストと共に十字架せられたり」

「死にました」と。それはいい加減な生き方でも、肉体の死でもない。存在的にもう死にしました。存在的に葬られてしまった。そうしたら今度は、私の中に――私がどうであろうと、そんなことに関係なしに――キリストが生きている。キリストの生命が。「キリストが生きている」とは、

「御霊のキリストが、キリストの御霊が――どう言ってもいい――それが私の中で生きていていける」

と。信仰は結局、この現実にくるまでは、まだ手前なんです。

●復活という生命を与える

『ハレルヤ』誌の35号にこないだのローマ書8章（1974年3月23、24日 第6回春期福音特別集会「キリスト者の信望愛」）を書いた。私は力強く書いたつもりだから、よく読んでくださいよ。熟読含味してください。非常にコンデンスして書いてあるから、いい加減な気持ちで読んで分かん。もう本当に文字を食らってくださいよ。聖書はいうまでもないが。



この十字架にキリストはのぼった。

「もうしょうがない、彼らは。全然分かってない。赦してやってください」と。けれども、キリストは叫んだ。

「わが神、わが神、なんぞ我を棄てたまひし」

と。この叫びがなかったら、十字架の意味はまたないんです。神に全的に信頼し、自分を投じて、信じ込んで、

「神と一如になって生きていた私を、なぜ、お棄てになるか」

という。キリストはいきなり天界へ昇っていいわけです、十字架なんかにからなくて。「なぜ、お棄てになるか」ということは逆説的に言うと、

「この私がいもし生命を棄てなければ、人の罪ははどうにもならん」

と。神に背いているところの人類の一人びとりの罪――

「罪とは神に背いていること、神との結びが切れていること。神との結びが切れているのを、結び返しをするのが宗教だ」

と言ったでしょ、「レリギオ」というのは「結び返し」の意味だと――この罪の価は死である。万人はもはやお終いなんです。我々はもし神に審かれたらお終い。お終いのやつをお終いにしないでくださったのが「十字架」なんです。

「私がお前のお終いになった」

と。神の畏るべき律法はとも我々は実行できない。この律法を本当に果たす者は一人もいない。

「義人なし一人だになし」

という。だから、律法に、罪に死んでしまった。けれども、キリストはその義を全うした方です。キリストはその律法を満たした人、律法に打ち勝った人、罪に打ち勝った人です。それが

「我々の代わりに罪を全部引き受けた」

というのが十字架ですから。

それでは、打ち勝ったものはどうしてくれるか。罪に打ち勝ち、死に打ち勝ったキリストの現実はどうしてくれるか。それをこれから与えようというのがキリストの復活なんです、復活のキリストなんです。

今日は、「キリストの復活」と書かないで、「復活のキリスト」と書いた。復活のキリストがなかったならば、十字架の贖いだけでは、パウロさんもどうにもならない。罪から贖われ、罪から解放されたって、それはまだ空無の世界なんだ。なるほど無の世界に入った。罪から無罪の世界に入った。無罪の世界に入っただけでも、無罪放免だけれども、人間は放っておけば、またダメになるに決まっている。そうしたら、

「今度は、実力を与えるぞ」



と。その実力は何か。その実力を示したのがこの復活という生命なんです。

●平安なんじらに在れ

復活のことは福音書のマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの終りの方にみんな書いてある。ルカ伝24章のところには有名なエマオ途上のキリストのことが書いてある。エマオの方に向かっている二人の旅人にもう一人の第三の旅人がやってきた。そして、いろいろ話してくれる。

「変な旅人がいるなあ」

と思ったんだ、始めは。

「夕方になったから、これからご飯を食べるから、お入りなさいよ」

なんて言っただけ、食事を共にしようと思った。『キリスト道』（曠愛新書第6号）の表紙の絵がそれです。レンブランチの名画です。パンを裂いて与えようとした時に、その二人は、

「あつ、これはイエスだ」

ということが分かった。すると、イエスは姿を消した。彼らの胸の中にキリストの霊は一応入った。燃えるが如くになったという。それで、帰ってきたところがルカ伝24章36節。その二人が、

「³⁶此等のことを語る程に、イエスその中に立ち、

戸を閉じている中に入ってきたよ、

『平安なんじらに在れ』と言い給う。」（ルカ24・36）

これは「平安」と訳してあつて結構です。絶対に「平和」ではない。平安ですよ。キリストの言葉は平安なんです。「シャーローム」というユダヤ人の挨拶は――「こんにちわ」とか「さよなら」という――本来は「平安」という字なんです。それを「平和」と訳しているから大間違いです。

聖徳太子の憲法で、「和」ということを言っている。あの聖徳太子の角度ではやはりまだ人と人との和のことを言っている。けれども、「平安」というのは神と人との間の結びつき、魂が神と一つになっている世界、キリストと一つになっている世界、それが本当の平安なんです。それがなかったら、いろんなことにでつくわしてゴタゴタゴタするわけだ。この平安は力強いですよ。静かだけれども、もの凄い力を持っている。士師記6章に出てくるギデオンに言ったあの「平安」という言葉が一番先に出てくる言葉ですが、あれはギデオンが力を得ているんです。

「平安、なんじらに在れ」

と。「心安かれ」とキリストが言われた。湖上を歩いて来られるイエスを見て、恐れた弟子たちに、

「我なり、^{おそ}懼るな。平安、なんじに在れ。心安かれ」



と言った。ペテロが波の上を渡ろうとしたときに、風を見て恐れて沈みかかったら――まあその時は、始めはペテロはよかつたんだ――けれども、その次の瞬間にペテロは迷ってしまつて、風に氣をとられたものだから沈みかかった。なんだというわけで、またキリストは捕まえて助けてやつたけれどもね。

「平安、なんじに在れ」(シャーローム・レカー)

――女の人だったら、「シャーローム・ラーク」という――この言葉を、あなた方は忘れないように。ということとは、

「私はお前と一つだよ。だから、平安はお前に在るよ」

ということ。「平安、なんじに在れ」なんて言われると、

「さて、私はどうやって平安になろうか」

なんて、そうではない。「平安、なんじに在れ」と仰るときは、實力をもつて言っておられるのだから、

「私はお前と一つだよ。心配いらんよ」

ということですよ。そういう図太い信仰になつてくださいますよ。なにかというときすぐ自分の状態を考えて、

「どうだろうか、こうだろうか」

と心配する。だから、さつきから言っているでしょ。自分の状態なんか問題じゃありませんよと。

「自分の信仰はまだ弱いので」

なんて、いつになったら強くなるんですか。私に、

「信仰が強くなれ」

なんて言われたら、私はもうキリスト教をやめるよ。

「お前は信仰なんてなくていいよ」

「はい、それでありがとうございます」

と。無条件です。無条件の世界になると、絶信の信になる。信仰に絶した信がくる。

ここにはいろんな方がいらつしやる。肉体的に弱い方もいらつしやる。心配要らんですよ。生命の根源はキリストですから。二千年前に甦ったキリストは今も天界におられるんですよ、霊界に。

「天界とはどこですか」

なんて。空間じゃないです。

●霊肉霊骨

「³⁷かれら怖じ懼れて見る所のものを霊ならんと思ひしに、

幽霊かと思つたと、うろたえたところをその通りによく書いてあるね。聖書は偽りなく



書いてあるからいい。飾ってないから。

³⁸ イエス言い給う『なんじら何ぞ心騒ぐか、何ゆえ心に疑惑^{うたがひ}おこるか、そういう心騒ぎはしょっちゅうあるわけです。心騒ぐ人は騒ぎが、疑いの人はそこに疑いがくる。なんでもその人の状態がそのままその人のものになってくる。

ところが、受けとる人は、信受する人はどしどし進んでいく。単細胞にならなければダメです、複細胞では。単細胞動物にならなくては。人間は非常に複雑怪奇なものだけれども、それは本当に素晴らしい単細胞になれる。

³⁹ 我が手わが足を見よ、これ我なり。我を撫でて見よ、霊には肉と骨となし、

我にはあり、汝らの見るごとし』

まあ、驚くべきことが書いてある。あのマリヤには

「触るな」

と仰ったですね。今度はここでは、

「撫でてみる」

なんて言われる。

「霊には肉と骨とがないが、私にはあるよ」

と。さあ、これは困ってしまったね。大体、こういうのは、

「キリストの復活というものを信じさせるために、後からこれを付け加えて書いた」

なんて、普通言うわけだ。そうじゃない。キリストがここで言っているところの「肉と骨」というのは今までの肉と骨とは違うんです。

復活というのは、また元の状態に戻ったということではない。「復活」という言葉がまた躓きになる。「活」というのは、始めからキリストは生きていますよ、もう地上に居るときから。キリストの「活」というのは霊活なんです。キリストの活きというのは霊的な活きなんです、もう既に肉体を持っているときから。ただ肉体という肉と骨とを持っている。それはパウロがコリント前書15章で言っているとおり、

「肉の体あり、霊の体あり」

と。肉の体を持ちながら、キリストの生き方は霊的な生き方なんです。だから、キリストが今度は復活のことになると、この肉もこの骨も、もうこれは霊肉であり霊骨である。霊肉であり霊骨であるけれども、幽霊ではない。

インドにアバジという不思議なやつがいる。三千年も生きている。ときたま顕れる。そういう不思議な本を私は持っている。顕れてくると、実際に肉体を持っているように見える。ちゃんとそれを触ろうと思えばできる。ところが、忽然として消えてしまう。そういうインドに凄いのが一人いるんだけど。

キリストはもちろん、その凄さは楽にやっているわけです。普通の人には、普通の牧師さんや神学者には、これは本当は読めない。私はこのところを、



「全くそのとおりだ」

と言ったら、ある研究会でみんな一流の学者が笑ったから、私はそんなグループにいる必要ないから、出てしまった。

そういう霊肉霊骨なんです。

40 斯く言いて手と足を示し給う。 41 かれらよろこびあまり歡喜の余に信ぜずして怪しめる時、おもしろいね、これは。うれしいけれども、どうもこれは腑に落ちないと。それはそうだろうよ、今の霊肉霊骨が分からない。パウロさんは分かってくれていたけれども、このパウロさんはここにはいないんだ。

イエス言い給う『此処に何か食物あるか』 42 かれらあぶ炙りたる魚一片を捧げたれば、43 之を取り、その前にて食し給えり。』（ルカ24・37、43）

大変なことです。二つのお魚と五つのパンから五千人を食わせてなお余ったという、ああいう驚くべきことをする人ですからね。キリストをどうのこうのと言ったって、それはもう我々としては降参するほかに手がありますか。研究して分かりますか。降参すると分かるんです。キリストの前に平伏ひれふして、

「参りました！」

と言うと、キリストはその世界に入れてくださる。

「そういうことが一体あるのだろうか。これは後からの挿入ではないだろうか」

なんてやっているうちは絶対に入れない。聖書は人間が書いたから、たまには書きそこないも間違いもあるだろう。いいよ、そんなことは。その奥の世界がちゃんと読めてくるから。私は、もうこれはたまらない。

●キリストはわが骨の骨、肉の肉

アダムがイブに向かって、

「汝はわが骨の骨、肉の肉」

と言いました。あれは有名な言葉だね。アダムとイブの一体の関係を現実に語ったひとつの詩ですよ。最初の詩です。私たちにとつては、

「キリストはわが骨の骨、肉の肉」

である。この霊血、霊肉、霊骨——血もそうだ——を持つて顕れてきたところのキリスト、これは絶対界に自由自在に入ってしまう。幽霊でないとこの驚くべき霊肉、霊骨、霊血を持ったキリストが甦りのキリストなんです。キリストの霊生、霊の生命なんです。

今でもそうですよ。世界の終りに至るまで、新天新地の来るまで。私たちのキリストがそれだけのキリストでなければ、私の信仰は空しい。パウロが言っているとおりです。パウロがコリント前書15章で、

「もし、キリストが甦らなかつたならば、私の信仰は空しい」



と言っている。パウロが言っているのは、血気の体でなくて、霊の体を備えているところのキリストです。これは要するに霊体です。霊体を備えているキリスト。この霊体のキリストが即ち、

「わが骨の骨、わが肉の肉、わが血の血」

である。それを瞑想して信受してごらん。何かしらんけれども、全身にもうの凄惨な生命が通ってくるから。血気の体の奥に霊の体が形成されてくる。

我々の信仰は正に使徒的信仰であるというのがそういうことなんです。

「原始に帰れ、いわゆるカトリックでもプロテスタントでもない」

と。もちろん、カトリックの中にもプロテスタントの中にも、我々と同じ信仰を持つてらっしゃる方も今までの歴史にあったでしょう。けれども、いわゆるプロテスタントだのカトリックだのと、そんなことを言っているのではない。

「とにかく元へ戻れ、源泉に戻れ」

ということなんです。

それを深く瞑想して祈っているうちに全身が熱くなってくると、風邪なんかそのうちにどこかにいつてしまう。

「汝はわが骨の骨、肉の肉、血の血なり」

と言つて、甦りのキリストに向かって本当に告白できるようになったら、これはしめたものです。宇宙の大生命でありますから。

私は『ハレルヤ』35号にも書いた。私たちはそのように霊肉渾然^{こんぜん}として贖われんことを呻き待つている。けれども、このキリストが入ってくると、呻きは呻きだけでも、もうひとつ超えた世界に入るから、歓喜となる。叫びとなる。だから、私はあのロマ書8章のところで、

「信仰はじつと黙して受けとつている沈黙の世界。希望は聖霊の呻きと共に呻いて最後の救いを待っている。ところが、愛の世界でキリストを受けとつてしまうと、これはもの凄く歓呼の叫びとなる。この沈黙、呻き、叫びというものの三態がこの信・望・愛である。」

ということを書いた。そんなことは誰もまだ言わんよ。

「筆端に霊雲たなびく」

というけれども、そういう気持ちで私は筆をとる。祈りをこめて、あるひとつの中心点、焦点が結ばないことには書かない。そういう宇宙的なキリストを無条件に受けとるから、我々の気宇は壮大になる。「天地正大の気」なんていう藤田東湖の詩もなお及ばない。

●詩「新日本に寄する」

私は昨日、部屋を片付けていたら、こういう詩が出てきた。これは昭和28年（1953年）



6月9日作と書いてある。「新日本に寄する」という。これは「靈灯万里」より前に書いた詩です。

「新日本に寄する」

(1953年6月9日作)

世紀の嵐吹くなべに

小揺さゆぎもなき富士の峰

秋津島根の民草よ

力を表わすときは今

思想百鍊、世も我も

文化に資する創造の

生業なりわいさわに産みなさん

祖国の前途に栄あれ

大地の情熱あついを胸に秘め

噴煙けむり絶えせぬ火山国

大和島根の国民くにたみよ

愛を生くべきときは来ぬ

ああ、憎しみの闇の世や

愛いの火あかあかと

万の胸に灯きなん

祖国と世界に歓喜あれ

生死の絵巻いくちとせ

湖心に宿る琵琶の月

天賦豊けき国民よ

天恵具現のとき近し

ああ苦しみの渦の世や

地の果までも身を挺し

世の末かけて祈らなん

遍く世界に救いあれと。

そういう詩です。なかなかいいだろう。これがおそらく種になって私はこの9月に「靈灯万里」を書いてしまったらしい。その詩の核なんだ。八行の三節からなる詩です。自分で感激してしまった。そういうように日本の国はやつつけられたが、甦甦った。そういう烈々たる希望をもって私は書いた。甦甦りの気持です。



けれども、今となつてはどうですか。全くしょうがないね、エコノミカル・アニマル式で。経済的にどうだこうだと言つて大騒ぎする。もうこれは全然間違ひです。結局、すべての問題は煮詰めてみると、道德問題そしてその奥には宗教の問題ということになるんです。そこをいい加減にしておいて、枝葉を一生懸命にやつてもダメなんです。まあ五十歩百歩かもしれませんけれども、日本はどうもだいぶ悪いようだね。立ち返るところに立ち返らなくては。生活のために生きるのではない。本当に使命のために生きなかつたら、人生はつまらないです。

●十字架・復活・聖霊は離すことができない

コリント前書に入りましょう。コリント前書15章というのは、パウロは実にここで克明に書いてますが、パウロは他の書簡でも、

「イエス・キリストを死人のうちより甦らせ給ひし神」

という言い方をよくやつている。パウロは、

「十字架のほかはもはや何も語るまじと思う」

なんて言っているかと思うと、「復活、復活」と言っている。これは死と生です。本当に死んでいることは本当に生きていることなんです。だから、この十字架と復活は離すことができない。キリストの烈々たる復活の霊生、これは永遠の生命です。この永遠の生命をキリストは地上にあるときから持つているんだ。ただ、それは十字架という死を、贖罪の死を通さなくてはいられない。彼にとつては、贖罪の十字架は使命だから。彼の死に方は神さまから言いつかつた死に方なんだ。

「自ら棄つるなり」

とキリストは言つた。

「神さまから言われて自分で棄てるので、お前たちに十字架にかけられるのではな

いぞ」

というようなわけです。

「一粒の麦、地に落ちて死なずば」

という。「死ぬ」というのは破^われてしまうことだよ。そうすると、生命が出てくるわけだ。要するに、「自我に死ぬ」ということです。生来^{いづ}の自我に死ぬ。

「本我」はいいんですよ。本我をはじめから持つていたのはキリストだけです。どうして、キリストは本我を持ったかという、無我という境地において持ったんです。

「無我、無私、我なし」

という、

「神さまだけがあつて自分なんかいないぞ」

という境地が本我の境地なんです。だから、キリストは、



「我を見し者は父を見しなり」

と言われた。即ち、

「わが本我は、この父と一つであるときにはじめてそれが本我である」

と。「本来の我」なんです。この本我を失っているのが我々の自我というやつで、これが罪で、

「万人は罪びとである」

というのがそのことです。「すべての人は罪びとである」というのは、この本我を失っているということ。「パラダイス・ロスト」(樂園喪失)である。「ロスト・ビーイング」(失われた存在)ということだよな。

ところが、この自我に死ぬことは自分でできない。

「お前は自分の自我に死ねないね。それでは、私がお前の代わりに死んでやるよ」

というのが十字架なんです。だから、十字架を100%に「はい」と言って受けとれば、この自我はすつ、飛んで行ってしまう。自我は相変わらずあるよ。相変わらずあるけれども、すつ飛んでいるのです。わかりますか。

そして今度は、本我はどうして回復できるかということ、このキリストの霊生、復活の生命を受けとることによつて、この本我が回復されるわけです、本来の私が。それでは、

「それ(本我)はどうして受けとれるのですか」

というと、これは御霊です、聖霊です。だから、

「私は十字架を通つて天界に行ったら、約束の霊をお前たちにやるよ。そうしたら、

本ものになる。お前にも本当に復活の生命がくるよ」

と。この御霊を受けとらなかつたら、復活の生命は来ない。だから、パウロがさんざんローマ書8章で、

「御霊を宿さざる者はキリスト者にあらず」

と言っている。まあ、パウロさんというひとの手紙は大した手紙です。もうもの凄い構造を持っていますから。

この御霊を受けとるから、この本我の世界に入る。アダム・イブの事態よりかもっと素晴らしい世界に入るんです。あれは神話的な表現だもの。なにも昔のアダム・イブがいいと言っているのでも何でもない。神話的表現でいうと、あれは本我だけでも、本我の世界へもうひとつ入ると、いわゆるアダム・イブよりかはるかに素晴らしい、そこに書いてある「第二の人」に――アダムは「第一の人」だが、キリストは即ち「第二の人」――キリストによつて私たちが今度は「第二の人」になるわけだ。あるいは、「第三の人」と言った方がいいけれども。わがうちなるキリストの霊となる。

ゲーテが『ヴィルヘルム・マイスター』の「ヴァンデルヤーレ」(遍歴時代)の終りの方で教育の一番根本のことを言っている。さすがにゲーテだよ。

「人間は上なる神々



あるいは神でもいい、

を拜む。それから、横なる人に対する畏敬の念、

哲学的な存在、

下なるものに対する畏敬の念、

キリスト教は下なるもの、小さいものに対して本当に畏敬の念を持つ。それはこの福音の世界です。神の僕だもの。僕の姿です。

そして最後は、わがうちなる、我自身に対する畏敬の念。」

と言った。ああいうことを言ったから、普通の人は躓きますよ、あのゲーテの言葉に。

「我自身に対する畏敬」

とは何かというと、この本我のことをゲーテは言おうとしているんです。この本我は、しかし、キリストによらなければ回復できない。そのことはゲーテは言っていない。本来、神の姿に創られている、「エーベンビルト・ゴッテス」（神の似姿）だから、本来の我というものに対して、

「ああ、ここに神さまの姿がある」

と言つて、「畏敬の念」という気持ちでゲーテは言ったんでしょうけれども。それはいかにして回復できるかというところ、この御霊が来なければ本我にはならない。だから、

「十字架・復活・聖霊は離すことができません」

と私は言っているわけです。

●復活のキリストが現れた

コリント前書第15章に戻ります。

1 兄弟よ、さきにわが伝えし福音を更に復^{また}なんじらに示す。汝らは之を受け、之に頼りて立ちたり。2 なんじら徒らに信ぜずして我が伝えしまを堅く守らば、この福音に由りて救われん。

「この福音」と特に言っている。

3 わが第一に汝らに伝えしは、我が受けし所にして、キリスト聖書に应じて旧約聖書によって、ことにイザヤ書53章、

我らの罪のために死に、⁴ また葬られ、聖書に应じて三日めに甦えり、⁵ ケパに現れ、

ケパ即ちペテロ、

後に十二弟子に現れ給いし事なり。⁶ 次に五百人以上の兄弟に同時にあらわれ給えり。

不思議なものです、霊の世界は。

その中には既に眠りたる者もあれど、多くは今なお世にあり。⁷ 次にヤコブ



に現れ、次にすべての使徒に現れ、⁸最終には月足らぬ者の^{いやはて}ごとき我にも現れ給えり。

「最終には月足らぬ者のごとき我にも現れ給えり」

と言っているこのパウロさんは何を言おうとしているかというと、使徒行伝9章です。復活のキリストが現れたその現れ方で最も素晴らしい決定的な、あるいはドラマチックなもの、使徒行伝9章、22章、26章に三回パウロが告白しているところの、あのダマスコ途上におけるパウロに現れた復活のキリストなんです。これをいい加減にして、パウロはわかりませんよ。

サウロというやつは――「やつ」と言ってはわるいけれども。まあ、やつなんだ、始めは――7章の終りの方に書いてある。54節に、

「⁵⁴人々これらの言を聞きて心、怒に満ち^{はがみ}切齒しつゝステパノに向かう。⁵⁵ステパノは聖霊にて満ち、天に目を注ぎ、神の栄光およびイエスの神の右に立ちたもうを見て言う、⁵⁶『視よ、われ天開けて人の子の、神の右に立ち給うを見る』⁵⁷ここに彼ら大声に叫びつつ耳を^{おお}掩い心を一つにして駆け寄り、⁵⁸ステパノを町より^お逐いだし、石にて撃てり。証人らその衣をサウロというパウロのことです。

若者の足下に置きけり。⁵⁹斯くて彼等がステパノを石にて撃てるとき、ステパノ呼びて言う『主イエスよ、我が霊を受けたまえ』⁶⁰また^{ひき}跪づきて大声に『主よ、この罪を彼らに負わせ給うな』と呼ばわる。斯く言いて^{ねむり}眠に就けり。』（使徒行伝7・54～60）

石に撃たれて鮮血にまみれながら倒れているステパノが完全に勝利しているわけです。これに賛成しているのが、誰あるう、パウロなんです。殺人犯だ。そうして、まだ意気揚々としてダマスコ途上に向かっているのだからね、迫害の途上に。その時に復活のキリストがいよいよたまらなくなつて現れた。これが使徒行伝の9章です。

「³往きてダマスコに近づきたるとき、^{たちま}忽ち天より光いでて、彼を^{めづ}環り照らしたれば、⁴かれ地に倒れて『サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか』という声をきく。⁵彼いう『主よ、なんじは誰ぞ』答えたもう『われは汝が迫害するイエスなり。云々』（使徒行伝9・3～5）

と。彼は完全にキリストの御霊に撃たれてしまつて、ぶつ倒れて、目が見えなくなつた。口がきけなくなつた。ものが言えなくなつた。食べられなくなつた。三日めにアナニヤの所へ行つて――これはもうちゃんとアナニヤに示されているんだ。不思議なことですね、これは本当にある。

「サウロというやつが来るから、按手してやれ。あれはやがて福音の器にする」

と――按手されて目が見えるようになった。全くキリストに反抗していたパウロが完全に



打ちのめされてしまった。復活のキリストに撃たれて、パウロは聖霊のバプテスマを受けた。それから、深く祈りました。瞑想しました。そしたら、十字架が何であるかが本当にしつかりと彼に受けとられてきた。だから、彼は、

「私は大きな間違いをしていた。この傲慢な自己義認者をキリストは撃つてく
ださった。今までのものは塵芥ちりあくたと思う。イエスを受けた私は、もう今までの
ものはどうでもいい」

ということになって、彼はエペソ、ピリピ、コロサイ書で告白している通りです。

「キリストの中にはもう神の一切がプレローマしている」

と。充滿しているところのキリストは自分では——「ケノーシス」と言いまして——

「空無」

なんです。無しなんです。本当の「ケノーシス」の中に入っている者が本当の

「プレローマ」(充滿)

になるということは、そういうことです。コロサイ書に書いてある。

復活のキリストがパウロをひっくり返した。パウロみたいなやつを、頑固な野郎をひっくり返した。皆さんは、パウロよりかよほどひっくり返りが早いと思うけれども。早くひっくり返ってください、もしひっくり返っていなかったら。ひっくり返らなくてもいいですよ、スーッと受けとれば。

そういうことで、この復活のキリストを御霊において本当に受けとって初めて、自分が甦える。「本然の我」に戻る。あるいは、「新しき我」となる。新生です。

「人新たに生まれずば、天国に入ることあたわず」

とキリストが言われたのはそのことです。

●キリスト自身が恩恵体

コリント前書15章に戻ります。「月足らぬ我に」どういように現れたかというところ、そういうわけですよ。

9 我は神の教会を迫害したれば、使徒と称えらるるに足らぬ者にて使徒のうち
最小いとしき者なり。

パウロは、自分は一番悪い野郎だから、いとも小さき者であると。

「罪びとの首かしらだ」

と自分で言ってますから。

10 然るに我が今の如くなるは、神の恩恵めぐみに由るなり。

「神の恩恵に由る」とある。パウロという人は「信仰」もずいぶん語ったが、「恵み」という言葉はパウロの書簡の中に123回あるそうです。この恵みがグルント(根底)だからね。キリストの、十字架にしろ、復活にしろ、聖霊にしろ、全部それは恵みとして——恵みという



のは要するにキリスト自身が恩恵体なんです――それを受けとることが「信」なんですから。斯てその賜わりし御恵は空しくならずして、凡ての使徒よりも我は多く働けり。これ我にあらず、我と偕にある神の恩恵なり。

「働いたのは神さまの恵みという力であつた」と、そういう言い方をしている。

「自分が働いているのではない。神さまが動かしている、キリストが動かしているんですよ」

ということ。キリストに動かされるような人になったら、もう自由自在です。それはもうどんな患難も耐えていく。

にぎり飯に塩をかけて、沢庵とかたまには豆腐だとか卵だとか、そんなものを食べていれば、なにも三万円なんか余計にもらわなくて大丈夫なんだ（笑）。ストライキなんかする必要はひとつもない。ストライキするから悪いことになる。そして、靈的に強くなれば、かえって日本は災いを本当の意味で幸いにするのにさ。それがみんなただ物に囚われているでしょ。日本人は情けない国民になつたね。本当の大和魂はどこにいつてしまったか。

大体、国旗を本当に重んじないなんて、とんでもないことだと思っている。もう世界最高の国旗です。こないだ入学式ではつきり言つてやった。私は、誰がいようと遠慮なしだ。悪ければ、いつでも辞めるから。絶対に真理は強いですから。本当に真理に捕らえられてものを言っていると、人は、

「なにかこれは理屈ではないな」

と、耳を傾ける。魂の世界はごまかしがきかないから、本ものにぶつかると、魂はなにか響く。

●死人の復活という目的

¹²キリストは死人の中より甦えり給えりと宣べ伝うるに、汝等のうちに、死

人の復活よみがえりなしと云う者のあるは何ぞや。

サドカイ人やなんかはそうなんだ。

¹³もし死人の復活なくば、キリストもまた甦えり給わざりしならん。

この言い方はちょっと妙に響くでしょ。キリストは甦えつたという事実、事実原因があるから、だから死人の甦えりはあるのだということを、逆にこういう言い方をしている。もう少し言うと、内容は

「死人の復活という恵み、死人の復活という目的がないならば、キリストもまた甦えり給わなかっただろう。キリストが甦えり給うたのは、お前たちに死人の復活というものを事実をもつて証明するためになさつたのだ。お前たちに復活を与えようとしていた」

という言葉でありますから。いわゆる文字面の意味でもつての原因結果ではないから、間



違わないように。

¹⁴もしキリスト甦えり給わざりしならば、我らの宣教も空しく、汝らの信仰もまた空しからん、

「空しいぞ」と。「空しからん」ではなくて、本当にこれは空しいですから。

こないだクリスマスに手島さんが亡くなって、私は翌日の26日にも行って、火葬にして遺骨を拾った。もし、これで手島郁郎がお終いだったら、本当に空しいよ。けれども、そうじゃない。手島君の魂は霊体を賜りつつ、霊界にもうちゃんとして行ってしまうている。

●血気の体、霊の体

そのあとに、「血気の体あり、霊の体あり」と書いてあるでしょ。⁴²節、

⁴²死人の復活もまた斯のごとし。朽つる物にて播かれ、朽ちぬものに甦えらせられ、⁴³卑しき物にて播かれ、光荣あるものに甦えらせられ、弱きものにて播かれ、強きものに甦えらせられ、⁴⁴血気の体にて播かれ、霊の体に甦えらせられん。

とある。

「血気の体」

というのは、英語でいうと、「ナチュラル・ボディ」と言ってもいいけれども、「ソーマ・プスヒコン」と言つて――「プシヘー」というのは「魂」という字ですけれども――

「生まれつきの血肉的なもの」

です。「ソーマ」というのは「体」という字です。それに対して、

「霊の体」

というのは「ソーマ・プニューマテコス」という。今の「ソーマ」というのは「体」として、「サルクス」「肉」というのは、それが自己本位の存在を「肉」と言うんですから、間違わないように。神中心の存在を「霊」という。

そういう、「霊の体」に甦らされる。キリストは、もちろん我々と同じ肉体を持っていた。この「血気の体」をキリストは持つておられたけれども、それが今度は完全に「霊の体」に変質変貌してしまうわけだ。

血気の体ある如く、また霊の体あり。⁴⁵録して始の人アダムは、活ける者となれりとあるが如し。

「活ける者」というのはヘブライ語でいうと「ネフェシユ」という字で、ギリシア語の「プシヘー」と同じ字です。

而して終のアダムは、生命を与うる霊となれり。

これは面白いですね。

「終のアダム、即ちキリストは生命を与える霊となった」



という。

人に生命を与えることは愛なんです。「永遠の生命」というのはただ時間的に永遠なんて言っているのではない。永遠の生命は即ち、人に生命を与える愛の生命なんです。愛がなかったら、永遠でありえない。

「自分は永遠の生命で、あいつらはだんだん死んでいく」

なんて、そんなものはひとつも永遠ではない。そんなものはどこかでまた行き詰まってしまふ。神さまの霊愛、霊的な愛、アガペーを人に分かち与えるところのもの、そういった生命はどこまでも死なない。だから、

「生命を与える霊」

というのは素晴らしい言葉です。あなた方は救われて、

「私は救われた」

なんてのほほんとしていると、それはどっこい地獄へ行ってしまうよ。救われた者は、人を救う使命と義務を負っている。また、人を救わざるをえないんです。人を救い助けざるをえないような気持でないようなものは、本当はまだ救われていない。

私は『ハレルヤ』35号にも書いた。

「あの人はなんと愛の人だろうと、人に言われるような人に皆さん一人ひとりがないってください」

と。それにはキリストの御霊が本当に烈々としてうちに生きていなければ。そして、そこにはちゃんと智慧も働きますよ。知情意が渾然として働いていなければダメですよ。私が時々、

「なにをやっているか!」

なんて怒るのは、はつきりこれが動いてないんだ。なにか酔っているような、ただ酔っていたってダメだ、ちゃんと実存的に動いてないと。集会の在り方というものはちゃんと心得ていなくては。それは技術ではない。本当に御霊の世界に入れば自在に、知的にも行動的にも情的にも、正しく動くんです。

●復活のキリストと共に地上で甦っている人

⁴⁶ 霊のものは前さきにあらず、反って血氣のものの前にありて霊のものの後にあり。

⁴⁷ 第一の人は地より出でて土に属し、第二の人は天より出でたる者なり。⁴⁸ こ

の土に属する者に、すべて土に属する者は似、この天に属する者に、すべて天に属する者は似るなり。⁴⁹ 我ら土に属する者の形を有もてることく、天に属

する者の形をも有つべし。

そうなんです。血氣の体があるけれども、また霊の体もやってくるよという。そして、本当に完全な霊肉渾然たる救いになる。



50 兄弟よ、われ之を言わん、血肉は神の国を嗣ぐこと能わず、朽つるものは朽ちぬものを嗣ぐことなし。

地上にある限りは、しかし、我々の血氣の体をおそまつにはいかんですよ、

「血氣の体はどうでもいい」

なんて言ってるね。これは神さまの御用に立つためには、いくらでも血氣の体をその意味において重んじなくてはいいかん。これはやがて捨てられていく。けれども、これを本当に重んじて使っている人は、靈の体が本当に入ってくる。これをいい加減にして、酒を飲んで酔っぱらったりして動けなくなったら、それは靈の体は入ってきませんよ、そういう実存は。

だから、我々は、どんなに地上において望みがないようにみえても、本当に神の国を確実に実現していくことを、社会的存在としてもやっていかなくてはいいかん。それがどんなに空しいようにみえても、それが本当に神の国をつくるんです。いわゆる相対的ないろんな学問をおおいにやっていいけれども、それがどうかなるのではない。その根底があるから、それは空しくはないと言っているわけです。学問でも、仕事でも、どんなつまらないようにみえることでも、その根底が、よってきたところが天的なものを中心としているときには、みんなそれは靈的な意味を持っているんです。

51 視よ、われ汝らに奥義を告げん、我らは悉く眠るにはあらず、52 終のラッ

パの鳴らん時みな忽ち瞬間に化せん。

というのは、パウロたちはもうすぐに神の国が来ると思ってた待ち望んでいるから、こういう言葉が出てくる。

ラッパ鳴りて死人は朽ちぬ者に甦えり、我らは化するなり。53 そは此の朽つる者は朽ちぬものを著、この死ぬる者は死なぬものを著るべければなり。

54 此の朽つるものは朽ちぬものを著、この死ぬる者は死なぬものを著るとき

『死は勝に呑まれたり』と録されたる言は成就すべし。55 『死よ、なんじの勝

は何処にかある。死よ、なんじの刺は何処にかある』56 死の刺は罪なり、罪

の力は律法なり。57 されど感謝すべきかな、神は我らの主イエス・キリスト

によりて勝を与えたもう。58 然れば我が愛する兄弟よ、確くして揺くことなく、

常に励みて主の事を務めよ、汝等その労の、主にありて空しからぬを知らばなり。

もう、死も罪も、そんな刺はひとつも恐いことはない。これはホセア書の言葉です。ホセア書の言葉は別な意味で使っているけれども、パウロはそれを逆用してしまった。

このどうにもならない、しょうがない野郎だけれども、そんなものはや問題ではない。勝っているんですよ、罪にも死にも。その罪や死に本当に根源的に勝っているということ、キリストの御霊を受けてはつきり受けとてないことには本当の生命は来ないし、そういうものを受けとっている人は本当に復活のキリストと共に既に地上において甦っている人



なんです。

そういった永遠の生命、復活の生命をもつて突き進んでいく。そうすると今度は、ダークサイド（闇の方）を見る必要はない。いつも明るい方を見て、そしてキリストを受けとつていく。そうすると、陰が消えていく。光を受けとれば、闇は消えていくんです。闇をなんとかして消そうと思って、キリストの永遠の霊光を閉じていて、自分のローソクでもって闇を消そうとしたってダメだよ。いまにくたびれてしまつて、ローソクはまた消えるよ。ローソクや電気の灯ではダメなんです。キリストという不滅の太陽を受けとつていく。そういうわけですからね、いいですか。

●天地一如

コリント前書15章の31節に、

「³¹兄弟よ、われらの主イエス・キリストに在りて、

「キリストに在りて」というのは、

「キリストの中にいて」

ということ。「に在りて」という言葉は、「の中に在つて」ともつとはつきり読むといい。

汝等につき我が有てる誇によりて誓い、我は日々死すと言う。」

「自分にはいつも死んで、お前たちの中に生きている」

と。もう、パウロは自分を問題にしない。それだからいつも、

「これキリストの生命の現れんためなり」

と。キリストの死を負っているから、その生命が現れるということ。

源信の歌にこういうのがある。ずつと昔に源信僧都という坊さんがいたね。

「我だにもまず極楽に生まれなば知るも知らぬもみな迎えてん」

という。これは仏教の言葉ですけど、自分みたいなやつが先ず天国に生まれてしまう

――もう地上にあつてですよ――生まれてしまうと、

「知るも知らぬも我を迎えん」

というけれども、今度は、「知るも知らぬも我は迎えん」と言いたいところなんです。

これは、コロサイ書3章をみると、

「汝等もしキリストと共に甦えらせられしならば、上にあるものを求めよ、キリスト彼処に在りて神の右に坐し給うなり。²汝ら上にあるものを^{おも}念い、地に在るものを^{おも}念うな、³汝らは死にたる者にして其の生命はキリストとともに神の中に隠れ在ればなり。⁴我らの生命なるキリストの現れ給うとき、汝らも之とともに栄光のうちに現れん。」（コロサイ3:1～4）

とある。いいですか。もう地上において――「もし」なんて言つたつて、パウロはローマ書でもそういう言い方をしていたね――



「汝ら、キリストと共に甦えられた以上は」
ということだよ。

「汝らはもうキリストと共に一緒に甦えってしまったからには、天界のものを求めよ、キリストは彼処にいまして神の右にいたもうから。汝ら上にあるものを思い、地にあるものを思うな。汝らは死にたる者にしてその生命はキリストとともに神の中に隠れている。地には死んでいるが、天上には生きている。キリストと共にもう天界の中にいるのと同じことだ。地界を既に天界にしている。天国人として生きている。だから、キリストがいよいよ現れ給うときは、これと共に栄光のうちに現れることになるぞ」

と。もうひとつ私に言わせると――パウロは「天と地」と一生懸命で言っているけれども――これは天地一如になっている。天地一如になっているから、もう本当にそのように天界のキリストと共に甦ってしまったっていると、地上もまた天国化しているわけですよ。

「天国は汝らのうちにあり」

と言うでしょ。だから、天地一如で、なにも空間的に分けているわけではない。即ち、「天のことを思え」というのは、

「本当に天の中に自分を入れてしまうと、この地上もまた天と同じことになってしまおう」

ということですよ。

●一つに渾然となってしまう

いいですか。本当の現実というものは、必ずこの二つのものを一つにしている世界なんです。ここには男と女とがいる。男と女がある。けれども、これは本当に兄弟姉妹となれば、それぞれのうちにおいて一つに生きている。だから、本当に愛の交流のあるところには、パウロは、

「我らをこのキリストの愛から離れしむるものが、何ものがあるか」

と言ったでしょ。その「我ら」というものは、男ばかりでも、女ばかりでも、男と女と一緒にであろうと何でもかまわない。とにかく、本当の世界はみんなこの一如になっている。

「奴隷も自主も、男も女もない」

とパウロは言っているじゃないですか。

「キリストに在つてはみんな同じだよ」

と言っているのはどういふことかというのと、そういうことなんです。「同じ」ということは、「一如だよ」ということです。

「一如の世界だよ」

と。パウロさんというのは非常に自在な世界にいますから。非常にもの凄い分析をするか



と思うと、全部ひっくるめて一つにしまっている。宇宙的なんです。

「万物を賜わらんや」

と言う。私はそこにも書きました。なぜ、あんな図太いことを言うかというところ、キリストという宇宙的なものと一つになると、万物が自分の友だちになってしょうがない。

「雨よ、風よ、雲よ、日よ、月よ」

なんて言っただけで呼ぶようになる。詩篇148篇みたいに。アッシジのフランシスがそうです。小鳥がみんな寄ってきた。そういう、本当の世界はもう一切、無差別の世界になってしまふ。無差別というのは、ただいい加減にするという意味ではない。ちゃんと秩序は知っているんだ。秩序は知っているけれども、そいつが一つに渾然となってしまう。わかりますか。もう最高の境地はそうなんです。

だから、キリストの復活の、

「永遠の生命のキリストは今もなお私たちと共にいつもごさる」

と。

「主さまー」

と、我々が呼ぶときに、この復活のキリストではないですか。天界のキリストではないですか。やがて来たりたもうところのキリストではないですか。それだけの実を受けとっていないければ。念力どころのさわざではない。あんなのはちよこつとした奇蹟には相違ないけれども、本当の念力は人を活かす念力です。キリストの念力なんです。

そうしたら、もう何をしようとも、自在となるし、それが本当に人を祝福していくことになるし、有限でありながら実に無限のものを持っている、無限無量の世界になる。もう楽しくてしょうがない。

クリスチャンでくすぶっているのはまだ本ものでない。絶対にくすぶってはダメです。なにかちよつと調子がわるいと、えらくくすぶる人があるけれども。いつもニコニコしていなければ。悲しみの中でも微笑みを持つ人にならなければ。おしまい。

